

寸言

日油株式会社
代表取締役社長
小林 明治



ペンシルからH3へ、日油グループのさらなる挑戦

当社は、〈バイオから宇宙まで幅広い分野で新しい価値を創造し、人と社会に貢献する〉を経営理念とし、独創性のある製品を様々な分野で展開しております。特に、日本で唯一の宇宙ロケット用固体推進薬メーカーとして、日本の宇宙開発の歴史とともに宇宙ロケット開発の道を歩んで参りました。

当社と宇宙開発とのかかわりは、1954年に東京大学の糸川英夫博士からの協力依頼を受けた富士精密工業株式会社（現、株式会社IHIエアロスペース）の戸田康明氏に、当社武豊工場（愛知県知多郡武豊町）の村田勉（後の社長）が防衛用ロケット弾に用いたマカロニ状の無煙火薬を提供し、ペンシルロケット水平発射試験を行ったことから始まりました。

2018年に創立100周年を迎える当社武豊工場では、1996年までH-I、H-II、M-Vロケット用の固体推進薬を製造して参りましたが、現在は観測ロケット製造と、イプシロンロケットの開発・製造を進めています。また、当社種子島事業所（鹿児島県熊毛郡南種子町）では、1997年開設以来、H-IIA、H-IIBロケットのSRB-A用固体推進薬を製造し続けております。SRB-A用の固体推進薬は、1本当たり66トンにも及び、種子島出身の従業員による三昼夜連続の作業を経てモーターケースに注型される、まさに“地産地消”の製品です。種子島事業所の操業18年目にして到達した100本目のSRB-Aが本年2月に打上げ予定のH-IIAロケット30号機に装着されます。

また、ご記憶の方も多いかと思いますが、

2010年、M-Vロケット5号機で打上げられた小惑星探査機「はやぶさ」の7年ぶりの地球への帰還は、映画が3本も封切りされるなど、大変な注目を浴びました。この「はやぶさ」には当社グループの日油技研工業(株)が製造した、宇宙ロケットや衛星の各種切り離しに用いる火工品がカプセル分離やパラシュート開傘用に使用されておりました。さらに、2014年12月にH-IIAロケット26号機で打上げられた「はやぶさ2」には、同じく当社グループの日本工機(株)が爆発成形技術を応用して開発した衝突装置（爆薬系）が搭載され、小惑星「Ryugu」からのサンプルリターン・ミッションの成功が期待されています。

かく言う私も2013年8月に種子島宇宙センターで打上げに立ち会いました。夜明けとともにH-IIBロケットが打上げられた光景は大変感動的で、当社グループが宇宙開発に大きく寄与できていることに改めて誇りを感じました。

ここ数年来、米国では民間打上げサービス会社が新興し、日本では宇宙基本法の成立、イプシロンロケット、新型基幹ロケット（H3）の開発着手、2024年までの宇宙ステーション運用延長等の計画があり、日本の宇宙開発は大きな転換期を迎えています。今後、世界の衛星需要がますます拡大し、商業衛星打上げサービスの国際競争が激しくなることが予想されます。こうした中、今後も日油グループは、高品質、高性能な固体推進薬、火工品等で日本の宇宙開発に貢献していく所存です。